

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2018年2月8日放送

「第116回日本皮膚科学会総会 ⑭

教育講演 4-4-3 プロアクティブ療法は市民権を得たか」

広島大学大学院 皮膚科  
准教授 田中 暁生

## はじめに

本日は、最近、アトピー性皮膚炎の治療で話題になることの多いプロアクティブ療法についてお話をさせていただきます。

プロアクティブ療法についての講演をさせていただいた際に、皮膚科の先生方からプロアクティブ療法はなかなか上手くいかないよというご意見や、うまくやるコツを教えてくださいというご質問を受けることがあります。本日のお話が少しでもそういったご意見・ご質問に対する答えになり、皮膚科医の皆様の日常診療のお役に立てば幸いに存じます。

## プロアクティブ療法とは

まず、プロアクティブという言葉ですが、英語の辞書で調べますと「先を読んで行動する」とか「事前対策となる」というような意味があるようです。例えば、proactive action は積極的な活動という意味で、proactive communication だと事前連絡というような意味になるそうです。

## proactive

[形] 1. 先取りする、先を読んで行動する  
事前対策となる (cf. reactive)

2. 順行の、前(方)向の

ジーニアス英和辞典第4版より引用

例

proactive action 積極的な活動

proactive communication 事前連絡

アトピー性皮膚炎でのプロアクティブ療法は、急性期の治療によって寛解導入した後に、保湿外用薬によるスキンケアに加え、ステロイド外用薬やタクロリムス外用薬を週2回など間歇的に塗布して、寛解状態を維持しようとする治療法のことを言います。それに対して、炎症が再燃した時に抗炎症外用薬を使って炎症をコントロールする方法をリアクティブ療法と言います。

皮膚がつるつるにきれいになっても、間隔を空けながら抗炎症外用薬を使って、湿疹の再燃を予防しようというのがプロアクティブ療法ですが、プロアクティブ療法をしていても湿疹の再燃や痒痒の再燃が起こる場合もあり、その時はしっかりと治療を行い、再び寛解状態に戻す必要があります。湿疹が再燃し始めているのに、そのまま間歇的な抗炎症薬の外用を続けていると湿疹のコントロールができなくなることがあるので、注意が必要です。せっかく皮膚がきれいになったのに湿疹が再燃すると、やはり患者さんはがっかりされますので、「外用間隔が空くと湿疹がまた出てくる可能性があること」、そして、「その時はしっかりと治療して再度湿疹の無い状態に持っていく必要があること」をあらかじめ患者さんにお知らせしておく、湿疹の再燃時の治療に対する患者さんの受け入れがスムーズになるかもしれません。

プロアクティブ療法を行う前提として大切なことは、急性期の治療でしっかりと炎症を抑え、湿疹を治すということです。プロアクティブ療法は維持療法ですので、炎症を抑えきれっていない場合は、外用間隔を空けてしまうと、すぐに皮膚炎が再燃してしまうかもしれません。皮膚の炎症が十分に抑えられているかどうかを診るのには、視診と触診が不可欠であることは言うまでもないですが、血清 TARC 値も参考になります。基準値内であることが望ましいですが、毎日塗っていたのを1日おきにするに当たっては、私の個人的な目安として、TARC 値を 1,000 pg/mL 以下にしたいと思っています。

## 症例

それでは、プロアクティブ療法の具体的な経過を、症例を用いてお示します。

症例は40代の男性です。幼少時からアトピー性皮膚炎と診断されて近医の皮膚科で定期的に通院し、ステロイド剤の外用による加療を受けていました。最近では strong クラス

### プロアクティブ療法

プロアクティブ (proactive) 療法は、再燃をよく繰り返す皮膚に対して、急性期の治療によって寛解導入した後に、保湿外用薬によるスキンケアに加え、ステロイド外用薬やタクロリムス外用薬を定期的に(週2回など)塗布し、寛解状態を維持する治療法である。

それに対し、炎症が再燃した時に再度抗炎症外用薬を使って炎症をコントロールする方法をリアクティブ (reactive) 療法という。

40代、男性

初診時のTARC値: 22,273 pg/mL

幼少時からアトピー性皮膚炎として皮膚科で定期的な加療を受けていた。現在も皮膚科に通院しながらstrongクラスのステロイド軟膏を毎日外用をしているが、もっと良くなりたという希望があり、当科を受診した。



のステロイド軟膏を毎日塗布していましたが、症状の変化に乏しく、さらなる改善を期待して当科を受診しました。初診時は顔面を含む全身に褐色の苔癬化局面を認め、強い痒痒を伴っていました。

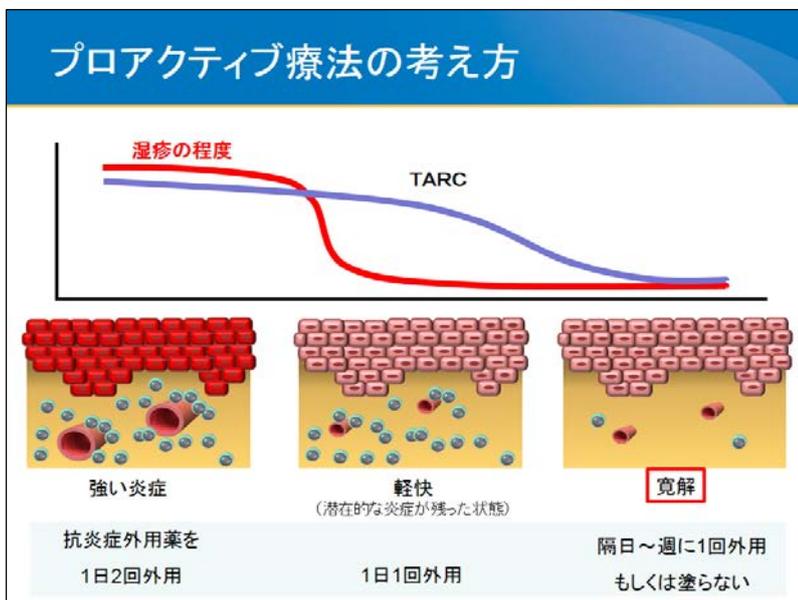
当科受診後は、塗布方法や塗布量の指導を行い、顔面と頸部に medium クラスのステロイド軟膏、躯幹と四肢には very strong クラスのステロイド軟膏の外用を行いました。

初診時の検査では血清 TARC 値が 22,273 pg/mL でしたが、治療による皮疹の改善と

痒痒の消失に伴って血清 TARC 値は減少し、1ヶ月後には、色素沈着は残りますが肌はすべすべで痒痒は全くなく、血清 TARC 値は 834 pg/mL になりました。また、徐々にステロイドの隔日外用から、週に2回の外用、週に1回の外用へとステロイドの外用間隔を空けていき、半年後には、血清 TARC 値は 414 pg/mL と基準値の範囲内にまで低下しました。そして、初診時から1年半以降には全く湿疹のない状態のまま、ステロイドの定期的な外用は行っていません。

この症例のようにアトピー性皮膚炎は重症度に関わらず、治療が効果的であれば皮疹は改善します。しかし、治療によって一見皮膚炎が無いように見える皮膚にまで改善しても、潜在的な炎症が皮膚に残っていることもあり、このような場合には皮膚炎が再燃しやすく、血清 TARC 値が十分に下がりきっていないことが多いです。そのため、この状態で外用をやめるのではなく、継続して皮膚をいい状態、すなわち湿疹のない状態を維持することによって、徐々に潜在的な炎症は取れ、皮膚炎の起きにくい寛解状態の皮膚になるとというのがプロアクティブ療法の考え方になります。

このように、皮膚の炎症をしっかりと取った後にプロアクティブ療法を行っていると、これまでは治りにくいとされていた成人の重症や最重症の患者さんでもステロイドの定期的な使用が不要になるケースは珍しくありません。そのため、プロア



クティブ療法は単なる維持療法では無く、湿疹が起きやすい皮膚を湿疹の起きにくい状態に変えていく治療法として認識され始めていると思います。

## 治療をうまく行うコツ

アトピー性皮膚炎の治療に限ったことではないですが、医師と患者が同じ目標に向かって歩むことは、治療をうまく行うコツだと私は思います。アトピー性皮膚炎の治療では2つのゴールを設定するといいかもかもしれません。まず、第一のゴールは薬を使ってでも、湿疹の無い、痒痒の無い状態に皮膚をすることです。そして、それを達成したら次のゴール、すなわち薬を使用しなくてもスキンケアのみで、皮膚を良い状態に保てるというゴールを目指します。第1の

ゴールから最終ゴールまでの間がプロアクティブ療法ということになりますが、この期間をうまく乗り越えるためには、その前にある第一のゴールをできるだけ短期間で達成することが大事だと私は感じています。そして、そのためには初診時の外用指導が重要になります。

適切に外用するという事は、患者さんにとって最初は難しいことであり、それを説明する医師や看護師も、それなりの労力を必要とします。また、患者さんが外用方法を習得した後にも、それを継続してもらうためには、患者さんには根気、我々には患者さんの皮膚をいい状態に保ちたいという情熱が必要になります。なぜなら湿疹が無くなってからも皮膚に外用剤を塗ることは、面倒と覚えることが普通だからです。プロアクティブ療法を行うに当たっては、正しい診断をして、単に薬を処方するだけでは不十分で、外用指導や医師の情熱などプラスアルファの診療スキルが必要になります。

私の個人的な意見かもしれませんが、プロアクティブ療法が難しい患者さんもいます。痒痒タイプのアトピー性皮膚炎の患者さんは、湿疹の無い寛解状態にするのが難しく、そもそもプロアクティブ療法の導入が難しいことがあります。また、私の力不足ではありますが、湿疹がある現状に満足している人や、外来への受診や外用を継続して行うことが苦手な人は、プロアクティブ療法を行うのが難しいと感じています。

## アトピー性皮膚炎の治療ゴール

### 第1のゴール

薬を使ってでも、皮膚を湿疹も痒痒も無い状態にする

### 最終ゴール

スキンケアのみで皮膚を良い状態に保っている

第1のゴールから最終ゴールまでの間がプロアクティブ療法

## おわりに

以上、大変簡単ではございますが、プロアクティブ療法についてお話をさせていただきました。湿疹の増悪を繰り返していた患者さんが、プロアクティブ療法によって抗炎症外用薬を使わなくても湿疹が出にくくなっていくのを見てみると、薬を使う使わないやプロアクティブ療法をするしないは方法論に過ぎず、重要なのは皮膚を炎症の無い状態に維持することであり、それが「アトピー性皮膚炎を治す」ことにつながっていくのだと再認識します。現時点ではアトピー性皮膚炎の治療薬のメインはステロイドやタクロリムスなどの抗炎症外用薬ですが、これから様々な治療薬が実用化される予定です。これらの新規治療薬が湿疹の無い状態の維持の一助になることが期待されます。